

茂泉昭男著『輝ける悪徳——アウグスティヌスの深層心理』

教文館，1998 年，251 頁

菊 地 伸 二

本書は著者によれば、「ある特定の方法をもってアウグスティヌスの思想やその史的意義といったものを明らかにしようとした研究論文といったもの」（3 頁）ではなく、「アウグスティヌスそのひとに目を向けてみようとしたもの」（3 頁）であり、「それぞれ異なった時に、異なった目的と思いの中で書きとどめてきた断想をそれぞれの形にしたいわば講話的」（5 頁）な四つの作品を収録したものである。ちなみに、最初と最後の作品は公表されたものであるが、他の二編は未発表のものであるという。したがって、四つの間に深い連関が見出されるわけではない。また、本書の表題となっている『輝ける悪徳』はその四番目に収められた作品の題名からとられたものであり、その副題の「アウグスティヌスの深層心理」は、特に一番目の「アウグスティヌス『告白録』の深層」という題及びその探求方法からとられたという印象を強く受ける。

ただ四編とも、アウグスティヌスの言葉を手がかりとしながら、彼の深層世界に入り込み、彼の言葉が発せられてくる土壌、または言葉の背後にありながら言葉を生み出している沈黙を探求し、いわばアウグスティヌスをしてアウグスティヌスたらしめている層を描こうとしている点では共通しているといえるだろう。したがって、「講話的」であるといっても、決して軽い意味で理解されるべきではなく、アウグスティヌスの言葉に厳密に裏付けられた多くの引用と注から構成されており、その言葉のあいだを堅実に分け入りながら、その奥にある深層世界へと入っていくという手法をどの作品もとっているが、その際、そこにはどうしても探求者の解釈にゆだねられる部分があることは否定できず、そのような著者とアウグスティヌスとの間の対話の軌跡をわたしたちに語るという意味で、あるいはまた、こちらから事前にある特定な方法で解明するというよりは、アウグスティヌスと向かい合い中で、たえず気にかかりな

がらも、いわば半ば意識の下に追いやられたものが、幾つかの刺激を受けながら、著者自身の内面から言葉のレベルに上昇したものをわたしたちに語る（四番目の成り立ちについては著者自身がある程度語っている）という意味で、これらは講話として見なすことができるだろう。

さて、一番目の「アウグスティヌス『告白録』の深層——挫折と再生の心底」は、二回に分けて語られたものであるが、前半では、『告白録』第1巻から第9巻までに描かれている「アウグスティヌスという人間」の自己描写のなかから、アウグスティヌス自身が捉えた「人間アウグスティヌス」を取り出すことが試みられ、後半では、「人間アウグスティヌス」が抱えていた問題を分析することを試み、そのことによって、その挫折の心底にみえる「アウグスティヌス的人間」の、いわゆる「翻りの構造」に目を留めつつ（15頁）、最後にその宗教的理解に言及する（17頁）。このことを通じて、著者は、アウグスティヌス自身が、個としての「人間アウグスティヌス」の描写を通してだれのものでもある「アウグスティヌス的人間」を語っている『告白録』の不思議な構造（17頁）を明らかにしようとするのである。

まず『告白録』の記述に基づいて、人間アウグスティヌス自身の苦悩が、「規則違反」「嘘と盗み」「罪の集団心理性」「罪悪感」「母モニカ」「内縁の妻とモニカとのはざま」「肉欲との葛藤」「実存的不安と死」という八つの項目に分けて論じられる。心理学者ジェームズなどの見解を織り交ぜつつ、それぞれに深い洞察がなされているが、モニカおよびその内縁の妻との関係について二つの項目をたてて取り上げたことは、それ自体興味深く思われる。

次いで、『告白録』回心記事の分析をするためにその用語分類を行なう。具体的には、倫理的用語、深層心理学的用語、実存論的用語、信仰・宗教的用語に分類するのであるが、この意図は、アウグスティヌス自身の経験が個人のものでありながら、しかもなお誰のものでもありうるという、その普遍性を説くことにあると思われる。これらの分析について、「まえがき」では「精神分析と実存分析と宗教とは共働することによって人間理解において予想を越えた成果を生む」（5頁）と言われ、「人間状況解明においてはそれぞれの分野からのアプローチが共同してなされ得る」（57頁）と言われており、これら三者は同等な資格で語られているという印象を受けるが、最終的に、神の恩寵と人間回復のことが述べられる時点で、「人間における「人格的統

合」は、アウグスティヌスの『告白録』に観察されるかぎり、新しい人間の回復であり、宗教的・神学的次元において捉えられなければならないことを示唆している……実存分析、精神分析は、宗教的人間理解の中で「健やかなる魂」を用意する道を持つのではないか」(86頁)と言われ、三者はむしろ同等でないことが言われる。著者の中では決して矛盾してはいないのだろうが、読む側にとっては、最初と最後では著者が語っているスタンスが微妙に変化していると思われる。

二番目の「アンブロシウスとアウグスティヌス——その私的関係と史的関係」では、通説によれば、アウグスティヌスはアンブロシウスから大きな影響を受けているとされ、確かにそれはそれとして否定できないのであるが、果たして両者のパーソナルな関係はどのようなものであったのか、どれほど親密であったのであろうかという疑問をバビニー、オメラ、クルセルらとともに投げかける。両者の関係を『告白録』資料を厳密に分析することによって、その言葉の背後にある深層へ向かっていくのであるが、その中でアンブロシウスとアウグスティヌスとのあいだにある「ごちなさの因子」として四つの要素を取り上げている。全体として著者は、その要因をアウグスティヌスの側により強くみており、「アウグスティヌスの控え目は、「大物にたいする極度の遠慮」に由来するものであったかもしれません。しかし、より注意してよいことは、ある重要な飛躍をしようとする前に人がよく経験するように、アウグスティヌス自身の内面に未だ解決をみないある種の問題があって、そこに原因する迷いが会いたいという意欲を妨げ、容易に踏み出し得ないという葛藤を作り出していた」(127頁)と語っている。示唆に富んだ深い洞察である。また、両者の出身の相違からその要因を推察した部分(126頁)も興味深く思われた。しかも著者は、ここでボンディウスが『聖アウグスティヌスの生涯』で「アウグスティヌスはアンブロシウスを尊敬し、彼が行なう講演を非常に注意深く、かつ熱心に聴いた」と語っている言葉を大切なものとして受け止めて、確かに両者はパーソナルな意味で親密な出会いは欠いていたかもしれないが、しかし彼の説教を通して聖書の解釈を含め、アウグスティヌスのキリスト教理解が根本から変わったことは否定できず、その意味で両者は大きな歴史的なコンテキストにおいて出会ったのであると結論していることこそ、大いに教えられることであった。

三番目の「アウグスティヌスの修道院構想とその精神」では、彼が回心直前にボンティアヌスからはじめて修道院の存在を知ったときの感動から、カッシアコム時

代、タガステ時代と次第にその構想を深めていったプロセスを、特に『カトリック教会の道徳』を深く読みながら、アウグスティヌスに即して丹念に跡付けたものであり、回心という出来事をより積極的な意味で評価することにもつながる重要な見解を含んでいる。また修道院の実現に際して、必ずしも東方的な禁欲的な傾向を強く出すのではなく、あくまでもその中心に神からの愛というものがあがり、それを起点としながら、神への愛、自己への愛、隣人への愛という三脚構造を実践していくことこそが一番の中心にあったことが力説され、修道院のイメージを再考する機会ともなり、これ自体興味深い叙述である。第六章「修道院での生活と修道院の役目」の箇所は、重要な叙述も含んでいるが、それまでの修道院構想を綿密に辿った流れからすると、話題が広がりすぎてしまい、やや緊張が緩んでしまうという印象も受けるが、最後に訳されたアウグスティヌスの修道院規則は極めて貴重なものである。

四番目の「『輝ける悪徳』——その解釈をめぐって」は、ギリシャの倫理思想をアウグスティヌスがどのように理解したかという点で、思想史的にも興味をそそられるテーマであるが、その典拠をアウグスティヌスに求めて、シュルツ、マウスバッハ、パウゼンと遡ると、ことの外、決め手を見出すことは難しいことが判明する。今度はその原因となると思われるテキストを絞りこみ、中でも一番その可能性の高い『神の国』第19巻25章に注目し、綿密に調べていく。重要なことは、もちろんその言葉がそのままの形であるかどうかということではなく、その言葉が言い表そうとしていた事態に対して、当のアウグスティヌスがどのように理解していたかということであるが、著者は、「悪徳とは理性そのものの謂いではなく、逆立ちした理性、不信仰の理性に他ならない」(220頁)とし、そのような理性が、罪を発見する力を喪失しているところに問題性を見出しており、それは「神の愛」によってのみ、その克服が可能になってくるとして、『ヨハネによる福音書講解説教』にある「姦通の女」の例をあげる。この箇所の説明は正しく時宜にかなっており、説得力を伴ったものである。最後に「神の愛によって勝利されるときにのみ、悪徳は打ち負かされる」と言う『神の国』の言葉が引用され、それまで講話に耳を傾けていた者は、改めて輝きを失う悪徳に気づかされることになるのであるが、この書の副題にある「アウグスティヌスの深層心理」を探求する営みは、この作品においてこそ、十全な意味で達成されたと言ってもよいのではないだろうか。